

読書を勧め親子で図書館

ニュース・進路 家庭で会話

ゲームは制限 朝食習慣を

2013年度の国の全国学力調査の詳細な分析から、親の年収や学力が高いほど子どもの学力も高い傾向が明らかになった。一方、学力向上に効果的な親や学校による働きかけや、経済的に不利な環境で学力を伸ばす工夫の実例も示された。分析結果を詳報する。

の国語Aでみると、年収200万円未満の子の平均正答率が53%なのに対し、年収1500万円以上だと76%となるなど年収が上がるほど成績が良い傾向だった。

家庭の年収と子どもの学力の関係について、国による全国的な調査は初。お茶の水女子大の耳塚寛明副学長の研究班が担当した。



全国学力調査の分析

小6と中3を対象に文部科学省が実施し、基礎知識中心のA問題と活用力をみるB問題で国語と算数(数学)の学力をみる。2013年度は、公立778校を抽出して保護者約4万人へのアンケートと子どもの学力調査結果などを分析。親の年収と学力の関係を小6

学力伸ばし 格差縮めるには 全国調査の分析から

少人数指導や小中連携 効果的

子どもの学力を伸ばすのに、「特に影響力が強い」とされたのは、本や新聞を読むことに関する行動だ。親の年収や学力に関わらず、高い効果が示された。

学力との関連が高い順に例を挙げると、本や新聞を読むよう勧める▽一緒に図書館に行く▽小さいころ絵本の読み聞かせをした▽子どもと読んだ本の感想を話し合うなど。「言語の価値を理解したり、読む習慣を身につけたり、新しいことを学んだりする力を習得している」と研究班はみる。

親子の会話も比較的、学力への影響が大きい。効果のある話題

は、社会の出来事やニュース▽勉強や成績のこと▽将来や進路のことなど。次いで、テレビゲームで遊ぶ時間を制限するなど「生活習慣」も影響があった。

一方、学校に対する好感度や学習意欲には、親子の会話が最も効果的だった。「読書に関する行動」や「生活習慣」も比較的、効果が高い。「生活を整え、親子間の信頼関係をつくり、様々な助言をする家庭ほど、子どもが自分から勉強し、学校に楽しく行く傾向が強いことを示唆している」とする。

年収や学歴で親の働きかけ方は違ふのか。研究班は家庭の年収と両親の学歴を基に調査対象を4分類した。年収と学歴が最も高いグループと最も低いグループを比べると、子どもに高い学歴を希望▽英語や外国文化に触れるように意識▽良い成績へのこだわり▽本や新聞を勧める▽計画的に勉強するように促すなどの点で最も高いグループの多さが目立った。

親の年収や学歴に伴う学力格差はどうしたら縮められるか。

家庭の年収と両親の学歴による4分類で、最も低いとされたグループの子どもで全体の成績上位25%に入っていたのは小6で17%、中3で12%(算数・数学B)。その特徴をみると、規則正しい生活(朝食の習慣、ゲーム時間の制限など)▽読書に関して親が働きかける▽勉強について親子で話す▽家での学習習慣がある——などの点で、同じグループで成績下位の子どもより多くみられた。

親の関わり方と子の学力の関係

数値は小6国語Aの平均正答率

子どもに本や新聞をすすめる	69.4%
テレビゲームの時間を限定	67.4%
子どもと社会の出来事について話す	66.9%
	54.0%
	57.9%
	55.9%

あてはまる
あてはまらない

親の年収・学歴による格差の縮小に効果的な学校の取り組みは何か。研究班は、小6算数Aの成績分布と学校の取り組みを基にした分析から、放課後の補充学習▽習熟の遅い子に対する少人数指導▽小学校と中学校の連携▽家庭学習の与え方に関する教員間の共通認識——の4点を挙げた。

研究班は実際に格差縮小の成果

地域特性に応じた格差縮小策も分析。大卒者や管理職の比率を基にした指標で調査対象校を4分類し、学力向上に効果的な取り組みを調べた。大卒者・管理職の比率が最も高い地域以外では、親が学校・地域行事に積極的に参加したり、学校が親の要望に適切に対応したりする良好な関係づくりが効果的だった。

(岡雄一郎)